

IV LIS 教育の事例研究 6件に関する KALIPER プロジェクト報告

Victoria Marshall, Tom Wilson, Joanne Gard Marshall, Roma Harris

Marshall, Victoria ; Wilson, Tom ; Marshall, Joanne Gard ; Harris, Roma.
Plus Ca Change, Plus C'est Different; A Report from the KALIPER Project on
Six Case Studies in LIS Education.
Journal of Education for Library and Information Science. Vol.42, No.3, 2001,
p.206-219.

KALIPER プロジェクトの枠内で計画した一研究の予備的結果を報告する。参加校からの回答には各校のカリキュラム変更に関わる経験（変化のきっかけとなった圧力、変化の様相、変化の結果など）が記述されている。検討の結果、すべての大学に共通する圧力もあるが、カリキュラムの変化の状況は環境条件に従って多様であることが窺われる。主な影響要因としては、キャンパス内での図書館情報学 (LIS) のイメージ、知的分野の一つとしての情報の学際的性格、教員のバックグラウンドの多様性、情報分野内での教育の主導権をめぐる競争、他の職種との比較における図書館専門職の役割などがある。

本稿では KALIPER 計画の 5 つの研究チームの 1 つによる研究の予備的な結果を報告する¹⁾。KALIPER 計画はミシガン大学 Joan Durrance 教授の指導の下に情報図書館学 (LIS) 教育におけるカリキュラム変化の方向性と程度を分析することを目的としたもので、その全容は ALISE 2000 会議の別のセッションで紹介されている。

参加大学

当チームが担当した 8 つの LIS 大学院のうち、詳細な分析が可能であったのはミシガン、ピッツバーグ、プエルトリコ、サウスカロライナ、シラキュース、ノースカロライナ（グリーンズボロ校）の 6 校であった。この事例研究のサンプルは少ないが、内容的には豊富で、学生数や取得可能学位の数の範囲も広く、教育方法も伝統的なものからハイテクを駆使したものまで変化に富んでいる。上記各大学、特に頻繁な連絡やインタビューに応じられた方々のご協力に謝意を表したい。

方法

プロジェクトの研究主任者 Karen Pettigrew が配布・回収した学部長・理事に対するアンケートの結果がチームに与えられた。この調査は特定の分野について、過去3年間に行われた、または今後3年間に行われる予定の自校における変化を問うものである。

当チームの担当した最初の大学であるミシガン大学をテストケースとして利用し、それに基づいて以後のデータ収集の方法を決定した。同大学のウェブサイトには全米図書館協会の認証委員会 (Committee on Accreditation, COA) に提出された最新の自己検討レポートが掲載されている。このサイトから課程および教員についての情報、および変化の状況の記述を取得した上で、教育の量的負荷や各課程への登録のデータなど詳細な情報の提供を要請し、教員5名に対して電話インタビューを行った。

1998年11月から1999年1月にかけては更に7つのプログラムを担当したが、詳細な分析が可能であったのはそのうち5つである。大部分の場合、データ収集は(1)ウェブサイトの検討、(2)ALISEの統計レポート3年分(Evelyn Daniel, Jerry Saye 提供)の検討、(3)各校提供の入学・登録統計の検討、(4)各校提供の年報その他のレポートの検討、(5)学部長・理事アンケート結果の分析、(6)送付したアンケートに対する回答の分析、の6段階で行った。アンケートに対しては4校から8件の回答が得られ、更に2校の事務責任者に電話インタビューを行った。サウスカロライナ大学に対してはチームメンバーの一人 Joanne Gard Marshall がキャンパスの近くに居住しているため、直接訪問・面談が可能であったため別扱いとしたが、Marshall と Carolyn Lipscomb が提出したレポートは結果に含めた。

アンケートおよびインタビューから得られた、変化の要因と結果に関するデータは Tom Wilson が分類し、テキスト分析プログラム Atlas.ti で処理した。このようにして得られたミシガン大学およびプエルトリコ大学の変化の描像については、ALISE 2000 会議で本稿と関連して論議された。

結果

学部長・理事アンケートの結果を総合的に見た結果によれば、各大学とも大規模な改革を進めているが、その変化の程度や目的は大学によって異なる。調査結果の概要は1999年版 Bowker Annual に掲載されている。ミシガン大・シラキュース大は全般にかつ大規模な変革の時期を過去3年間に経験したと報告し、ノースカロライナ大グリーンズボロ校、ピッツバーグ大、プエルトリコ大、シラキュース大(再度)はいくつかの分野で今後3年間に大規模な変化を予定している。サウスカロライナ大では連続的な変化が進行中であり、プログラムと教授法の両方に影響が現れている。

事例研究対象大学の学部長・理事の見解を全体的に見ると、最も変化の大きい分野と

して挙げられるのは他学科との関係、財源の変化、市場での位置づけ、教員の異動、課程内容の変化、必修科目、教授法などである。

この研究では変化を促しその方向に影響する要因を見出すことを試みたが、変化を促進する要因が状況によっては変化を妨げるように働くことが間もなく明らかになった。最も多く挙げられた変化の促進要因(かつ時には阻害要因)は、新技術の発展とそれに関連する費用、新しい専門主題領域を持つ教員の出現あるいは存在、他の LIS プログラムとの競合、変革のための財源の存在などであり、また特に重要な要因として、卒業生の能力に対する学生、雇用者、卒業生、職能団体の要求がある。

情報という知的分野

調査対象大学すべてに共通する最も普通な動因は、情報という知的分野が常に拡大を続けていることである。新しい情報技術の成長と符節を合わせた自分野の知識ベースの拡大・深化によって各々の学部は深甚な影響を被り、様々な構造的変化が引き起こされた。修士レベルのプログラム構造のために採用または維持された戦略には次のようなものがある。

- 知的分野全体のカバーを目指す一連の専門化した学位の提供(シラキューズ大、ミシガン大)
- 1つの全体的学位を提供し、その内部での専門化を認める(ミシガン大)
- 1つのゼネラリスト学位を提供し、種々の研究科、修了証明書、あるいは修士以後の課程について選択肢を提供する(プエルトリコ大、サウスカロライナ大)
- ニッチ分野を見出し、それに適合する知的基盤を定める(ノースカロライナ大グリーンズボロ校)

知的領域の拡大に対処するための努力は各大学とも活動のほとんどすべての局面にわたって認められる。

知的領域の拡大の最も明白な帰結は、司書職が分野そのものの権化から分野内の一専門職へと変化したことである。特に技術指向の大学のウェブサイトを見ると、司書職をいくつかの専門の一つと位置づけ、情報産業とその関連技術の拡大を専門教育や雇用の理由とする傾向が明らかである。そうした変化の程度は、新しい課程(特に実験的な課程)、新採用教員の担当分野、研究テーマ、研究資源に対する関心などに反映されている。

一方、ALA の認証を受けた学位を廃止した大学も廃止を予定している大学もないこと、本稿で触れる大学のすべてが州の承認を受けた学校メディアプログラムを継続して

いることにも留意する必要がある。

学科および学位の名称

学科名を変更して「図書館」の語を放棄する動きが一部に見られるのは不思議ではない。名称変更に対して最も一般的になされる説明は、この分野の拡大に対応する必要からというものである。さらにほとんどの大学が学位名に「情報」の語を含めている。新しい学位名はまた学界での位置づけをも示している。ミシガン大学では専門学位の名称を Master of Science in Information (情報学修士) に変更した。ピッツバーグ大学、シラキュース大学では伝統的な名称 (それぞれ MLIS, MLS) を維持しているが、Master of Science の枠内で ALA 認証以外の学位を授与している。

調査対象大学のうち Master of Library Science を授与しているのはシラキュース大学のみである。同校では教育の対象者、目的および教授される技能がすべて司書職中心であるため、革新的学科のイメージと学位名の間ギャップがあるとは考えていない。複数の学位を設けることは、卒業生の能力について雇用者や学生の混乱を回避できること、カリキュラムにおいて各々の中核分野により集中が可能であることなどの利点があると見なされている。

これに関連して、司書を目指す学位を授与している大学ではすべて ALA の認証を依然重視しているが、(1) 将来にわたっての有効性や学習形態、(2) ALA が MS 学位を認証することの適切性について疑問も提起されている。

調査対象大学が授与する学位が多様であることから、当初は学位の数も種類も大きく増加しているのではないかと予想されたが、実際には、学位の数は増えてはいるものの、その増加は比較的緩やかである。学部長・理事アンケートへの回答によれば、複数学位の授与、学士レベルの学位、代替プログラムなどが注目を集めているが、修士レベルの新しい学位は計画されていない。

学内体制の集中化

1980年代に多く行われた学部閉鎖によって課程の見直し・改訂に影響を受けた大学は1校のみであったが、Parisの報告書「図書館学部の閉鎖」²⁾の対象となった学部は同報告書の勧告を重視したようで、学内で学際的協力を積極的に推進するばかりでなく、外部との提携の事例も見られる。

学内において、大学院教育(場合によっては研究プログラムも)の活動的な一部としてのイメージを強化することは共通した願望であり、この新しいイメージの中核となるのは情報技術の革新的・専門的な活用である。大部分の回答者は過去数年のうちに、特

に教育、コミュニケーション、ビジネスの面でイメージが向上したと考えている。シラキューズ、ピッツバーグ、ミシガンでは工学、コンピュータ、政策などの学部との連携を実現した。このことは学内での注目度を高める効果があり、シラキューズ大では情報学部がホットな分野として学生の人気を集めるようになった。ミシガン大では新ビジョンが他学部の支持を受け、他学部での情報関連科目の廃止、学部間協力の推進などを通じて情報分野での権威が認められたと報告されている。ノースカロライナ大学グリーンズボロ校においては、教員が学務に積極的に参加したことが注目度を高める要因の一つとなり、新資源（特に設備・機器）の面で有益であった。

LIS 学部との共同学位または複数学位への関心の高まりも報告されている。ミシガン大・シラキューズ大では法学部との共同学位プログラムが推進されている（ミシガン大では情報学部より先に法学部がこれを承認したことが注目される）。ミシガン大・ピッツバーグ大ではビジネスおよび政策研究との複数学位プログラムが計画されており、ピッツバーグ大では更に生命科学情報学センター (Biomedical Informatics Center) との複数学位、コンピュータ科学・電気工学・通信・ビジネス各専攻との共通 Ph. D. を提供することになっている。シラキューズ大では経営学部、公共コミュニケーション学部との共同 B.S. 学位や、工学部・コンピュータ科学部との共同でプロジェクトソフトウェア管理の修了証明書を授与している。より伝統的な形態に沿ったものとしては、サウスカロライナ大学が英語学および歴史学との共同修士号を授与しているほか、情報科学に関する学士レベルの学際的副専攻科目についての学内討論を計画している。

クロスリスト科目（サービス科目）の増加も報告されている。提携相手の学部は伝統的なもの（たとえば学校司書認定の需要に応えるため教育学部と提携する例は多い）のほか、新規な分野とのクロスリスト科目も増加しており、しかもこれは多様化に積極的な大学に限らない。たとえばプエルトリコ大学では経営、計画、コミュニケーションなどの他学部に属する科目が含まれており、準備中の修了証明書授与科目には他学部の課程も含まれる。サウスカロライナ大ではジャーナリズム専攻学生に情報検索を、教育専攻学生に児童文学と情報技術を正規に教授しており、全学横断的な一連の総合情報技術コースの開設を検討中である。ノースカロライナ大グリーンズボロ校では研究方法に関するサービス科目が教育学部に利用されており、また技術やインターネット情報の面での学部間の協力に対する関心が高まっている。

教員

LIS が学際的分野として認知されるにしたがって、他の専門分野の教員を兼任の形で採用することが増加しているようである。たとえばピッツバーグ大の教員名簿には、

コンピュータ科学、医学、工学、心理学、ビジネス、女性学など様々な分野の教員が兼任または客員として記載されている。プエルトリコ大ではビジネス、計画、コミュニケーション各学部との兼任者が予定されている。ミシガン大では最近教授陣を拡充し、公共政策、美術・デザイン、電気工学、コンピュータ科学、ビジネス、心理学、経済学の各分野の兼任教員を加えている。

ミシガン大学の事例は、他大学でも兼任教員が増加するにつれてより緩やかに起こっていることを代表している。すなわち新たに兼任となった教員には、情報行動や情報に関わる政治的問題に関する非公式の研究ネットワークに以前から参加していた者が多く、その興味を更に追求する足がかりとなる正式の地位を提供する学部があることは魅力的であったし、またそのような研究グループの存在が新しいカリキュラムの制定に際して大きく影響している。

LIS 課程の地位が向上した結果、教育の負担が増加して限界に達したケースもある。シラキュース大学、およびピッツバーグ大学情報科学・電気通信学部は、教員の不足が拡大の大きな障害になっていると報告している。シラキュース大では、1997/98 年度年報によれば、単位の 50%以上を非常勤講師や助手が担当しなければならなくなっている。これは過去 10 年間の授業時間の増加率が 278%であったのに対して、教員数の増加率が 75%にとどまったため、結果として登録学生数を制限せざるを得なかった。同様に、ピッツバーグ大学情報科学技術学部 (DIST) の代表者も、現在提供している課程の需要を完全に満たそうとすれば現在の 2 倍の教員が必要であると述べている。

調査対象校の多くは、財政上の困難にも関わらず教員数を維持し、更には多少の増員にも成功している。ミシガン大学は例外的に過去 3 年間で教員数を 2 倍以上に増加させている。医学情報、文書間・記録管理、特に情報技術などの専門分野を深化させる機会として教員数の減少利用する傾向も見られる。シラキュース大学の学部統合方針 (faculty of one) と同様に、複数の課程を担当できる教員 (boundary spanner) を採用することで協働効果を狙う試みもある。カリキュラムの拡張を可能にするためには教員の専門分野が重要であるが、いくつかの回答に指摘されているように、望ましい専門分野の教員が常に得られるとは限らない。

資金供給源

遠隔授業の拡大による収入、学部学生登録数の増加、および研究の 3 つの分野で資金供給源に大きな変化が見られる。新しい資金は遠隔授業の拡張、教員の新規採用、技術的インフラストラクチャーの改善に振り向けられている。

1998 年版の ALISE 年報で Howard D. White は種々のパラメータを検討し、たと

例えば U. S. News and World Report のトップ 10 リストに入るといった形で表される教育課程の質を最もよく予測するのは収入であると述べている³⁾。本研究の対象校のうちこのリストに入っているのはミシガン、ピッツバーグ、シラキューズの3大学であるが、実際、1999年版年報に記載されている1997/98年の収入はミシガン大・ピッツバーグ大がトップであり、シラキューズ大はイリノイ大に次ぐ第4位であった⁴⁾。これらの大学の他の収入源としては政府の助成金および受託研究や大手後援企業の支援金が主なものである。研究プログラムは教員の採用、学生募集、カリキュラムに影響を及ぼし、また新採用の教員が(最近のミシガン大学におけるように)新しい研究人脈やスポンサーをもたらすという意味で研究資金供給に影響を及ぼすこともあると報告されている。ミシガン大の回答者は、大学自体や Kellogg Foundation その他の資金源によって変化のための実験が可能になったと述べている。

研究指向の大学院のプロジェクトに関する調査によれば、研究は企業利益のためのものから公共的なものまで多岐にわたっているが、資金を最も多く受けているのは技術的進歩を目的とする研究であり、この調査に関する限りでは他の研究プログラムは依然として母体大学に最も多くを負っている。

競争

競合する大学が近くに存在することは規模の大小を問わず影響力を持つ。たとえばノースカロライナ大学グリーンズボロ校の場合、プログラムは教育学部に属するという組織上の要因のほか、同じ大学の中に存在する他の2つの認定図書館課程との競合に影響されている。ピッツバーグ大学の図書館情報学部(DLIS)は、クラリオン大学が隣接するサテライトキャンパスに一部の課程を置いていることから、地域的な競争に直面している。遠隔授業の普及も競合の確率を高める要因の一つである。

シラキューズ大学やピッツバーグ大学 DIST の ALA 認定外の修士課程は、全国的であるだけでなく ALISE 以外の大学との競合も経験している。シラキューズ大はこれまで LIS 教育の枠内では無競争に近かったが、ペンシルバニア州立大やワシントン大、特にビジネススクールが類似の IT プログラムを開発していることから状況は変化するのであろう。シラキューズ大では宣伝のために「情報化時代のための Original School」というキャッチフレーズを使い始めた。ピッツバーグ大 DIST のプログラムの競争状況も地方的ではなく全国的なものである。この場合比較対象となるのは、おそらくミシガン大学情報学部を除いて ALISE 関係ではなく、類似の情報科学技術プログラムを持つコロラド大(電気通信)、ジョージア工科大、メリーランド大(HCI)、マサチューセッツ大(コンピュータ科学)、ペンシルバニア州立大、ディポール大などのグループで

ある。

他方、プエルトリコ大学は地域内では事実上無競争状態であり、国際的にもユニークなニッチとなっている。中南米諸国にも図書館学教育は存在するが、同大学のようなレベルや規模のものはない。同大学の使命に従って LIS においても地域の経済・社会開発に寄与することが謳われているが更にそれを超えて、適切な教育施設がないエルサルバドルやコスタリカなどの近隣諸国での LIS 活動の改善をも目指している。

カリキュラムの内容

カリキュラム、特に中核的カリキュラムの内容の変化は他の KALIPER 研究チームによって多少とも詳細に検討されている。本稿では課程の名称を概観して、新しい課程の大部分が新技術に関わっていることを見出した。しかし全部がそうであるわけではなく、特に伝統的な科目ではそうである。課程の変化の程度を知るには、シラバス、課題図書、クラス割り当て(多くの場合不幸にして維持されない)の詳細な定性的分析が必要であろう。

遠隔授業

調査対象となった課程においては遠隔授業が増加している。事実、学部長・理事アンケートでは変化の領域として授業方法の変化が最上位にあった。課程の大部分は伝統的なものであるが、各校とも程度の差はあれ登録学生数と収入の増加のために電子授業を利用しているか、あるいは利用を計画している。

たとえばサウスカロライナ大学は LIS 課程を学内と遠隔授業の両方で提供することに関して指導的な役割を果たしている。移動の不自由な学生のために 1976 年に導入されたプログラムを基礎として、1992 年にジョージア、ウェストバージニア、メイン 3 州に居住する学生のために在地のまま履修できる LIS 修士コースのテレビ授業を開始した。MLS 課程全体が学内と同時に対話型衛星通信で提供されたのはこれが初めてであった。現在ウェストバージニア州で MLIS の第 2 期生への授業が行われており、1999 年秋からはジョージア州で修士以後の専修コースが開始される予定である。1997/98 年度には遠距離授業で 34 のセクションが提供された。

遠隔授業は、より小規模なプログラムにとっては手ごろな拡張手段として多く利用されているようである。ノースカロライナ大学グリーンズボロ校はシャーロットとアッシュヴィルの学生(約 120 人)に向けた学校図書館メディアの遠隔授業が定着しており、学内の遠隔学習センター (Telelearning Center) からインターネットを介して配信されている。遠隔授業によって増えた収益は更に拡張を行うために充当される。プエルト

リコ大学では新しい学校司書認定課程を遠隔授業で提供する計画であるが、これは専ら既存市場での生涯教育を目指すものである。

研究指向型大学のなかではシラキューズ大が最も野心的な遠隔授業計画を持っている。学位取得のための課程すべてに加えて、特定地域対象の専門プログラムの提供を始めており、たとえば通信に関する修了証書授与プログラムがカナダの一大学との共同で提供されている。「政府におけるインターネット情報資源管理」のコースはワシントン在住の遠隔授業受講者のみ利用可能となっている。このように同大学では遠隔授業プログラムに関しては居住地による受講資格制限を行っている。

生涯教育および代替プログラム

市場の拡大および収入増加の手段として、生涯教育プログラム、ワークショップその他の代替プログラムを利用する動きもある。たとえばプエルトリコ大学では大学院修了者対象の学校司書、アーカイブ、情報技術に関する専門課程や、修士号取得者対象の図書館管理、情報コンサルティング、法律専門の課程が計画されている。新しいスキルや専門分野が増加して一般的なプログラムでは対応し切れなくなっているというのが同校の認識である。

サウスカロライナ大学では修士号取得者を対象に、図書館情報学大学院課程修了証書授与プログラムと図書館情報学専門プログラムの2つを開講している。シラキューズ大学はハイスクール学生を対象とした情報管理・情報技術サマーカレッジの開催を予定しており、また大学院修了証書授与科目に通信管理、ソフトウェア・プロジェクト管理を追加し、さらに対話型マルチメディアの追加も検討中である。

調査対象校の大部分は履修証明なしの生涯教育イベントにも熱意を示している。イベント1回の平均参加者数から見て、ゼネラリスト系プログラムは依然としてかなりの関心を集めていると判断される。たとえばサウスカロライナ大学では地元教師向けのサービスを生涯教育プログラムに拡大し、「IT ジャングルを開発する」講座に過去2年間で4613人の出席者を集めた。

これに対してミシガン大・ピッツバーグ大の生涯教育イベントのクラスは小規模なものである。これは提供されているコースの性格によるものと思われる。たとえばミシガン大の「デジタルツールキット」のコースは学生と社会人を共に対象とする小規模の専門的コースである。その他のコースも特定のソフトウェアに関するものや少数の専門家向けの主題を取り上げたものも多く、たとえば「地理情報システム」「情報仲介業の起業と経営」などといったものがある。ピッツバーグ大学 DIST では産業界（たとえば Digital などの企業）向けの訓練コースを開催した実績もあり、今後 Java プログ

ラミングやネットワークに関する専門的な修了証書授与コースを提供する可能性がある。同大学のコースは一般的に言って LIS 専門家の一般的なニーズに応える生涯教育を目指すものではない。

専門化

専門化した学位および修了証書授与プログラムの増加と並んで、修士課程の専門化を図っている事例もある。この専門化は「科目の組み合わせのヒント」といったものよりも厳格で、修了証書が授与される場合もあるが、修士課程から独立したものではない。

ミシガン大学では最近の組織改革を経て、現在では MSI の中に、アーカイブと記録管理、人間とコンピュータの相互作用、情報経済・管理・政策、図書館情報サービスの 4 つの明らかに区別される専門的課程を包含させており、さらに情報技術課程の導入についても検討が始まっている。ピッツバーグ大学でも MLIS プログラムの中に専門分野としてアーカイブと記録管理、学校図書館、医学情報・医学図書館、児童・青少年向けサービスを設定しており、このような専門化の方向を更に追求するとしている。この傾向は当然教員の増加につながり、またカリキュラム中の必修科目を増やすことになる。

カリキュラムの構成

特に興味があるのは ALA 認定外の代替プログラムや専門課程の科目選択に要求される構成である。たとえばピッツバーグ大学では MSIS を得るには 4 つの必修科目に加えて、特定の専門分野で所定の単位を取得しなければならない。シラキューズ大学でも同様に、情報資源管理、電気通信・ネットワーク管理の MS (Master of Science in Information Resources Management, Master of Science in Telecommunications and Network Management) を取得するためには「セカンダリー・コア」として 3 つの分野 (track, stream) のそれぞれに関する所定数の単位が要求される。また更にいずれのプログラムでも最後の段階で仕上げのコースを取らなければならない。

一般的な修士課程の内部で専門化を進める傾向から、カリキュラムの構造化も進んでいる。ミシガン大学では専門課程に必要な 21 単位時間のうち 15 はその領域内の科目から選択しなければならない。ピッツバーグ大学ではアーカイブ専門課程で 7 科目が必須であり、残る 3 科目を保存、研究、技術の 3 分野から選択するよう指導している。医学関連の専門課程も同様に構造化が進んでいる。

登録学生数

調査対象大学においては、ALA 認定修士課程の登録学生数には、変動はあるものの

最近数年間にわたって特に劇的な変化はない。ピッツバーグ大・シラキューズ大では他課程の需要が増大している。ピッツバーグ大では情報科学・通信学科の学士および MSIS 課程が人気を集め、過去3年間で2倍の規模となったという。シラキューズ大の理学士課程も大規模化しており（1991/92年度の253人に対して1996/97年度は467人）志願者は更に増加を続けており大学の対応能力を超えるに至っている。同様に「その他の修士課程」も MS/IRM プログラムの人気と MS/TNM プログラムの開設に伴って急膨張しており、大学側ではこれに対応できず、登録定員を増加させず事実上の入学条件を強化する方向に向かっている。

性別

修士課程学生の性別分布については事実上変化は見られない。ALISE 統計では約80%が女性であるが、ALA 認定修士課程の登録学生も全体としてこのパターンに一致している。

ALISE 統計によれば、ALA 認定外の修士課程ではこのような偏りはやや減少しており、ピッツバーグ大学では38%、シラキューズ大学では42%が女性となっている。しかしこれらの数字は「その他の修士課程」として一括されたものであるため、より大きい偏りが隠されている可能性がある。シラキューズ大学自体の計算によれば、1998年秋学期のMLS課程では84%、MS/IRM課程では48%、MS/TNM課程では30%が女性であった。これに対して同大学ではBS課程の男女比率を1.5:1とする目標を設定している（現状では2.4:1）。また1997/98年度のAnnual Report to the Vice Chancellorでは、知的分野および性別の多様性の促進が中核科目を再編成して3つの共通科目を含める改革の主な理由とされている。

入学条件

調査対象のALA認定修士プログラムの大部分は基本的には伝統的な入学条件を課している。すなわちGPA 3.0（または平均成績B）の文学士号、GRE評点、推薦状、場合によっては志望理由書などである。しかしピッツバーグ、プエルトリコ、シラキューズの各大学では特にコンピュータ・リテラシーを重視した条件に移行しつつある。ピッツバーグ大学ではALA認定外プログラムについて、数学・統計学・コンピュータ科学の履修を必須としている。

卒業条件

卒業条件は依然として、中核的必修科目を含む所定の単位の取得であるが、更に厳し

い条件を課しているプログラムもある。条件厳格化の理由は就職(場合によっては更に研究)しようとする分野に不案内な学生の適性を高めることである。ミシガン大学は実習または特別科目の履修によって、所定の実習点 (practical engagement points) を取得することを要求している。ノースカロライナ大学グリーンズボロ校では最終条件 (capstone requirements) として、総合試験、master's project (正式な研究計画書)、student portfolio (自由研究) の3つのうち2つを選択しなければならない。シラキューズ大学の修士課程では最終科目のほかに実習、研究協力、自由研究のいずれかを課している。

卒業に必要な単位時間数は36時間が代表的であるが、ミシガン大学では最近48時間に引き上げられた。ピッツバーグ大ではMSISプログラムでは36時間であるが、MSTプログラムでは48時間となっている。

シラキューズ大学のIRMおよびTNMプログラムはそれぞれ42時間を要求している。このような数字から、技術的な内容の増加と必須単位数の増加との間には関係があることが推察される。プエルトリコ大学は例外的に42時間の要求を38時間に減らし、同時に基本的MISTを補完するものとして16? 22単位の修了証書授与プログラムを課す予定である。

考察

知的領域の拡大、新技術の発展、および教育範囲の地理的限界の消失によって、LIS教育の可能性と問題点が共に増大している。しかしこれらの要因が各地の文化環境、大学内環境、大学による雇用の状況の中に置かれる結果、表面に現れる強調点には大きな違いも生じている。この節ではプログラムの発展における顕著な共通性を探るとともに、いくつかの相違点を論ずる。

事例研究で取り上げた大学においては、変化に対する応答にいくつかの共通なパターンがあるが、どの分野が強調されるかは大学ごとに異なる。遠隔授業が拡張の主眼である場合もあり、学内提携関係の構築と研究プログラムの強化が優先している場合もある。より広いKALIPER研究の枠内での検討によって明らかになったことは、各大学それぞれが発展の途上の異なった点に位置していることであった。すなわち研究対象とした6年間のうちに、ある大学(ないし学内のあるプログラム)は1サイクルの終わりを迎え、ある大学はサイクルの途中にあり、またある大学は2つのサイクルの間の時点にあった。

変化を制度化する能力は言うまでもなく資金の制約を受けるが、既存の組織構造や文化も強い影響力を持っている。たとえばピッツバーグ大学とミシガン大学は、資金的に

は同程度であるが、教育方法としてはそれぞれ学位選択制、学位内部での専門分化というように異なった構造をとっている。また構造が類似していても基本的な発想が異なる場合もある。たとえばシラキューズ大学とピッツバーグ大学は分野の拡大に伴って学位取得課程を拡充してきた歴史があり、表面的には知的領域の拡大に対して同様に対応したように見えるが、根底にある発想は特にプログラムの統合に関して大きく異なっており、シラキューズ大学の学部統合方針はピッツバーグ大学の分離した学部とは全く異なる。大規模な統合的 ALA 認定プログラムを持つ大学は類似の反応を示すように思われるかもしれないが、共に ALA 認定大型プログラムに集中しているミシガン大とサウスカロライナ大は非常に違ったビジョンを持っており、サウスカロライナ大が伝統的課程を漸進的に変化させているとしているのに対して、ミシガン大ではその統合プログラムを革新的なものと考えている。

ALA 認定プログラムは依然として健在であるが、図書館専門職像としてどのようなものを学生に示すかは大学によって様々である。司書職と情報科学技術との関係については、同一大学の教員の間でも見解が一致しているとは思われない。このことは、大学の目標における司書職の位置づけに関する質問に対する同一組織内の職員の回答からうかがわれる。すなわち司書の役割は新しい環境にも十分適応できるような人間中心的価値および経験の基礎を提供することであるという回答がある一方では、この議論は新しいものに場所を与えるために必然的に起こる誇張の結果であって、司書職と情報科学の関係は時とともに然るべきところへ落ち着くであろうという見解もあり、さらには図書館学はすでに滅びたも同然であり、現在は全く新しいものが形成されつつあるという主張もある。新しい目標を設けることに合意が得られたとしても、各教員の出身分野の違いから、司書職と情報といったファジーな問題については異なった解釈が共存するであろうし、またそれが建設的な役割を果たすものと思われる。

調査対象の大部分では、学内で有力なパートナーとの協力関係を築き、プログラムに学際的視点を取り入れている。分野の拡大はプログラムの専門化を推進する結果となり、分断化が憂慮されている。分野に独立性を持たせる傾向の強い大学では、学生が問題を解決する際にチーム方式を推進することが必要と考えている。これは問題の解決に当たって情報専門化のみならず多分野の専門家のグループの協力が必要なためである。分断を軽減するための方法は大学ごとに異なっている。ミシガン大学は「バルカン化」を警戒して、学位の分割は行っていない。シラキューズ大学では最近、種々のプログラムの「相乗効果」を発揮する場を作り出すことを強調している。この目標は当然、中核的課程に影響を及ぼしたが、boundary spanner と称される教員の新しい地位を作り出したこともこれに関係している。学際的学習の必要性の根拠として、某大学の一教員は次

のように述べている。

「職種の境界線が曖昧化している例は少なくない。たとえば司書はネットワークについてある程度の知識を必要とし、ネットワーク専門家は情報の表現や検索について何がしかを知っていなければならない。知的所有権、遍在的サービスといった政策的問題には通信、情報管理、図書館管理などの分野が含まれている」

しかしこの回答者は同時に、情報という分野を統一的なものとは考えていないことを明らかにしている。同様に、技術的教育を推進している別の大学の一教員は、情報の世界の多様化が著しく進んでおり、もはや1つの組織ではそのすべてを代表し得ないことをALAおよびALISEは認識すべきだと述べている。情報関連職種や専門分野の多様性を受け入れることは、それほど技術面を重視していないプログラムにも見られる傾向である。修士課程内部での専門分化の例が増えていること、メディア専門プログラムにおけるNCATE証明書の導入などは細分化の進展を裏付けるものである。

ALA認定外の修士課程は科学的なモデルに基づいてカリキュラムを構成しており、学生側のコース選択にはより強い制約が課せられている。科目の履修順序や既修条件を厳格化する傾向も見られる。ALA認定プログラム内での専門化についても、中核的必修科目に加えて多数の科目が要求されるため、選択科目の数はやはり制限される。このような構造化は、まとまった知識を教授する必要がある以上不可避であると認識されているが、柔軟性を高めるために必修科目を減らそうとする方向と、条件を満たすために必要な科目数の増加との間に緊張関係があることも確かである。また学生になるべく多くの実務経験を与えること、他分野の関心を知らせることも必要とされている。

技術に関連の強いプログラムでは、履修者が産業界において「新しい知識労働環境」を管理する職務に就くことが期待される一方で、その具体的な職務は「まだ定義されていない」とされている。フォード主義以後の職場では卒業生は一群の情報技術的ツールを使用してカスタマイズされた製品の生産に当たることになるであろう。ある回答者の表現を借りれば、最近の教育は卒業生が新規な問題の解決法を自力で見出せるようにすることを目的とした「原則指向」であり、「よく知られていることを教える」旧来のカリキュラムからは(完全ではないにせよ)離れている。このため個々のソフトウェアの使い方を訓練するようなコースはワークショップに格下げされ、プログラム自体は学生が情報技術の基礎(知的にも資材面でも)を既に持っていることを要求する事例が増えている。

しかしこれと対照的に、ノースカロライナ大学グリーンズボロ校、サウスカロライナ

大学、プエルトリコ大学などは地域の図書館界と密接な関係を維持しており、それが卒業生の最も有力な就職先となっている。このような大学からの一報告によれば、カリキュラムの変更について意見を求められた地元図書館員は新しい方針に大きな懸念を表明し、地域のニーズを満たす専門家の供給を継続できるかどうか疑問であると述べたという。この種のプログラムには、新技術（最先端ではないとしても）と伝統的教育の最良の部分とのバランスがますます難しい問題になっている。

結論

6つの事例研究を含むこの調査で、分野の拡大と授業方法の可能性の増大によって、いくつかの共通な傾向はあるものの、多様化の余地がより大きいことが明らかになった。またこの調査から LIS 教育の方向性として次のようなものが示唆される。学際的接触の強化は変化の方向や速さにどのように影響するか、学内での LIS 学科のイメージ向上は定着するか、カリキュラムにおいて新旧の文化の緊張をどう解決するか、収入・威信・変化の関係は何に基づくか、プログラムや性別の偏りの問題点は何か、またそれをどう解決するか、など。

文献

1. Carolyn Lipscomb (ノースカロライナ大学チャペルヒル校非常勤教授)の協力に謝意を表す。
2. Marion Paris, *Library School Closings: Four Case Studies* (Methuen, N. J.: Scarecrow, 1988)
3. Howard D. White, "Summary and Comparative Analysis", in *ALISE Library and Information Science Statistical Report 1998*, Evelyn H. Daniel & Jerry D. Saye, eds. (Washington, D.C.: ALISE, 1998), 310.
4. *ALISE Library and Information Science Education Statistical Report 1999*. Evelyn H. Daniel & Jerry D. Saye, eds. (Arlington, Va.: ALISE, 1999).

著者紹介

Victoria Marshal : ニューファウンドランド記念大学健康科学図書館技術サービス部長、西オンタリオ大学図書館情報学 Ph.D. 課程に在籍中。

Tom Wilson : シェフィールド大学(英)名誉教授(情報管理)。

Joanne Gard Marshall : ノースカロライナ大学チャペルヒル校情報図書館学部長。

Roma Harris : 西オンタリオ大学情報メディア学部教授。

本稿は 2000 年度 ALISE 大会で報告されたものである。